

# 金融市場動向

— 平成7年4月 —

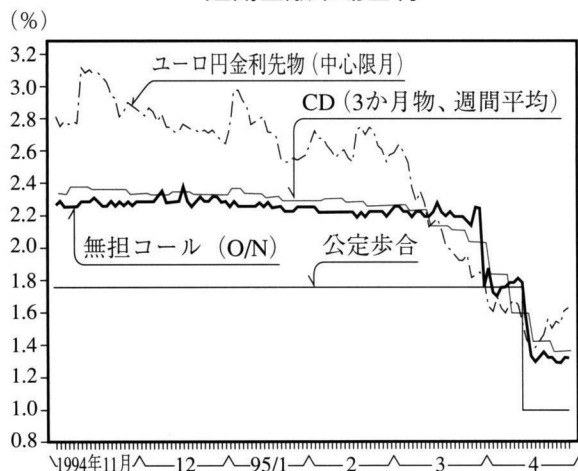
(平成7年5月17日)

## 1. 短期金融市場

4月中の無担コール・オーバーナイト物レートは、上旬は揉み合いで推移していたが、14日の公定歩合引き下げ(1.75%→1.0%)を受けて大幅に低下し、月後半は概ね横這いで推移した。CD(譲渡性預金)3か月物金利については、上旬から中旬にかけては出合い難の状況が続いていたが、19日には既往最低の1.33%で出合い始め、その後は1.35%前後の横這い推移となった。一方、ユーロ円金利先物(3か月物、金利ベース)は、中旬に大きく低下した後、月末にかけては若干上昇した。

コール・プロパー手形市場資金平均残高(全国)は45兆3,349億円と前月(42兆4,578億円)比大幅に増加した。

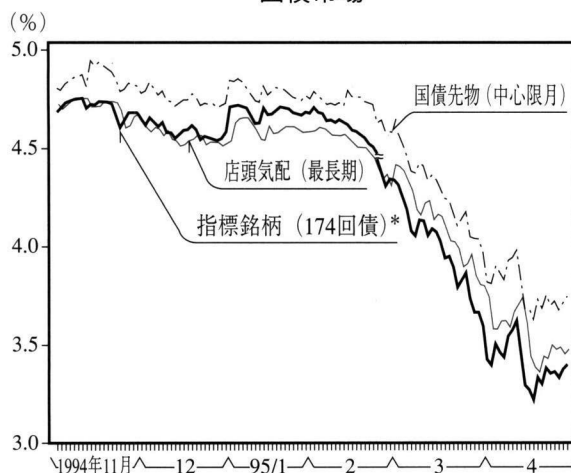
短期金融市場金利



## 2. 資本市場

4月の長期国債利回り(174回債)は、短期金利の大幅低下を受け中旬まで低下を続けた後、やや強含んだが、結局3.400%で越月した(前月末3.595%、国債先物中心限月利回りは3.745%<前月末3.966%>で越月)。国債の出来高は、現物(店頭取引)は高水準の前月並みとなったものの、先物は減少した。

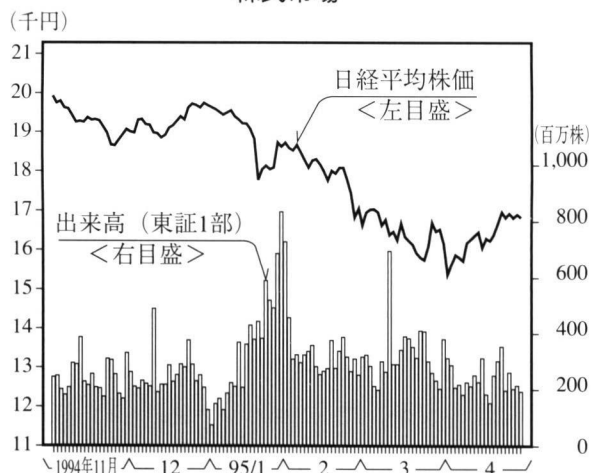
既発債市場利回り  
— 国債市場 —



(注) \*2月23日以前は164回債。

株式市況(日経平均株価)は、月初は下落したものの、その後は金利水準が全般に低下する中で持ち直し、結局16,806円と前月末(16,139円)を上回って越月した。株式出来高(東証1部、月中1営業日平均)は、2.37億株(速報)と前月(3.32億株)を下回った。

### 株式市場



4月の国内公募普通社債は、上旬に、長期金利の大幅低下を受けた電力、商社などの前倒し起債がみられたことから、月中2,850億円（3月2,320億円）とますますの発行となった。一方、国内エクイティ市場での発行（4月払込み分、増資を除く）は、株価下落に伴い転換社債のクーポンレートが上昇する一方、長期金利が低下したため、普通社債対比での発行コスト割高感が強まり、前月に引き続き低調な発行となった（3月930億円→4月480億円）。

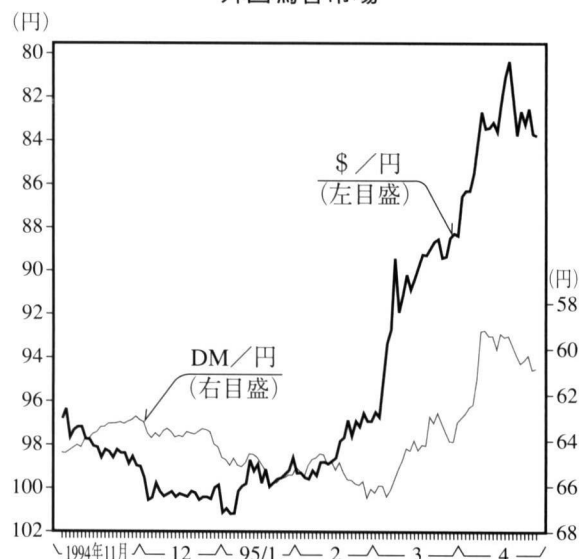
### 3. 外国為替市場

4月の円の対米ドル直物相場（東京市場、17時時点）をみると、前月来の急激なドル安基調が継続、中旬にかけて戦後最高値を更新し続ける展開となり、19日には一時79.75円まで上昇した。もっとも、その後はドル買い戻しの動きがみられたことなどから若干弱含み、結局83.77円で越月した（前月末88.38円）。円の対独マルク直物相場（東京市場、17時時点）は、3月末の独利下げを背景とした円高地合いを受け継ぐ形で、10日には一時57.55円まで上昇し、既往最高値を

更新したが、下旬には対米ドル相場同様弱含みとなり、結局60.87円で越月した（前月末63.24円）。

なお、東京外国為替市場の出来高（円対米ドル、直物および先物・スワップ計、1営業日平均）は234.4億ドルと、高水準だった前月（214.3億ドル）をさらに上回った。

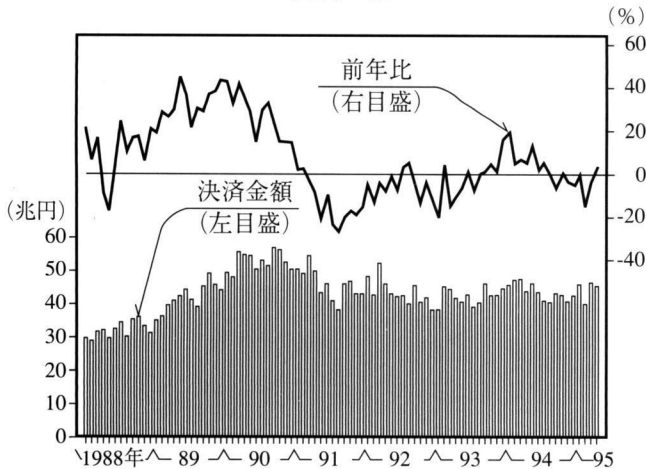
### 外国為替市場



### 4. 決 済

4月の資金決済の金額（1営業日平均）をみると、手形交換高（東京）は前年同月を大幅に下回った（前年比△42.6%）が、全銀システム取扱高は前年同月を上回った（同+7.0%）。この間、外為円決済交換高は前年同月を上回った（前年比+22.0%）。また、国債の決済金額（1営業日平均）については、移転登録、振込口座振替ともに前月に引き続き前年同月を大幅に上回った（移転登録：前年比+48.5%、振込口座振替：同+28.7%）。

## 決済金額



(注) 1. 1営業日平均。  
2. 手形交換高(東京)、全銀システム取扱高、  
外為円決済交換高の合計額。

## 5. 資金需給、金融調節

4月の資金需給をみると、銀行券要因が9,249億円の不足(前年同月1兆4,077億円の不足)となった一方、財政等要因は3兆9,235億円の余剰(同3兆9,653億円の余剰)となったことから、全体では2兆9,986億円の余剰(同2兆5,576億円の余剰)となった。

こうした状況下、日本銀行は売出手形、貸出回収等により資金を吸収した。

5月の資金需給(国債発行織り込み前)を窺うと、銀行券要因については、月中2兆4,000億円程度の余剰(前年同月2兆6,925億円の余剰)となる見通しである一方、財政等要因は、源泉所得税を中心とする税揚げが見込まれるものの、国債の償還等の支払いが嵩むこと<sup>かさ</sup>から3兆4,400億円程度の余剰(同2兆5,384億円の余剰)となる見通しであり、この結果、全体では5兆8,400億円程度の資金余剰(同5兆2,309億円の余剰)となるものと予想される。

## 6. マネーサプライ、銀行券、預金・貸出

3月のM<sub>2</sub>+CD平残前年比伸び率は+3.6%(速報)と前月に比べ0.1%ポイント低下した。また、広義流動性の平残前年比伸び率は+4.1%(速報)と前月に比べ0.1%ポイント上昇した。

4月の銀行券平残前年比は+4.4%と前月(+4.4%)並みとなった。

4月中の金融機関の預金・貸出動向をみると、預金平残(実質預金+CD、都銀、地銀、地銀Ⅱ)の前年比は+1.7%と前月比伸び率が低下した。一方、総貸出平残(都銀、長信、信託、地銀、地銀Ⅱ)の前年比は△0.1%と11か月連続の前年割れとなった。

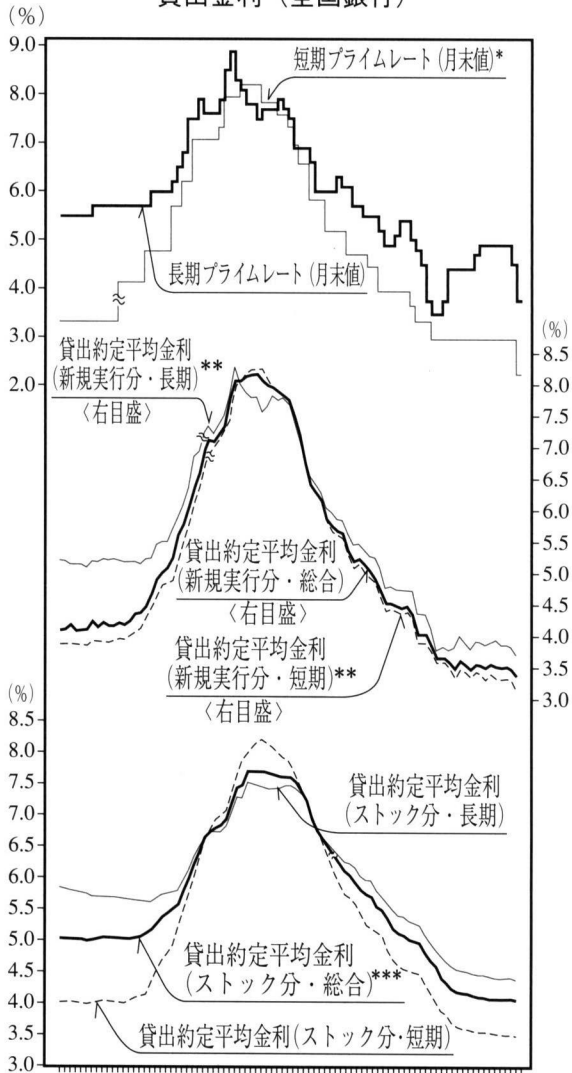
## 7. 貸出・預金金利

3月中の貸出約定平均金利(全国銀行)をみると、新規実行分については、市場金利の低下を受けて、短期が2か月連続、長期が4か月連続とともに低下となったことから(短期:前月比△0.184%、長期:同△0.134%)、総合でも5か月連続で低下となった(同△0.139%、2月3.435%→3月3.296%)。

また、ストック分についても、短期、長期、当座貸越ともに低下傾向を持続し、(短期:前月比△0.023%、長期:同△0.041%、当座貸越:同△0.024%)、総合では、21か月連続で既往ボトムを更新した(総合:2月4.032%→3月3.997%)。

この間、3月の定期預金金利(自由金利分<1千万円以上>、3か月以上6か月未満の全銀受入金利平均)は前月比低下した(2月2.090%→3月2.016%)。

### 貸出金利（全国銀行）



1988年 89 90 91 92 93 94 95

- (注) \* 1989年1月以降は都市銀行の中で最も多くの銀行が採用した金利。  
 \*\* 1990年4月以降は地方銀行Ⅱを含む。  
 \*\*\* 1992年4月以降は当座貸越を含む。

(調査統計局)